

# シューベルト作曲「冬の旅」・・・第一部

141109

部	No.	場面	分	疎外	内容
第一部 41分	1	おやすみ	5		よそ者としてやって来て、よそ者のまま去って行く。五月は僕に好意を寄せ多くの花束を贈ってくれた。あの娘は愛を語り、母親は結婚のことまで口にした。だが、いまや世の中は暗礁として、行く手は雪に埋もれている。僕は旅立ちの時を選ばずに、ひとりて道を探さなければならない。こんな暗がりの中で。月の落とす影だけが僕の旅の道連れだ。そして真っ白な草地で獣道を探ることになる。ぐずぐずすることはない、いずれは追い出されるのだから狂った犬どもは吠えるがよい、餌い主の家の前で。愛はさすらいを好むもの、それが神の思召し、一人から別の一人へ。素敵な恋人よ、おやすみ！ 夢見る君を起こして邪魔しようとは思わない。足音が聞こえないよう、そっと、そっとドアを開めよう。ただ通りがかりに、門のところに、おやすみ、とだけ書いておく。そうすれば君もわかるだろう、僕が君を想っていたことを。
	2	風見	2		風が風見とたわむれる、きれいな恋人の家の屋根で。頭がおかしくなった僕は思った、口笛で哀れな逃亡者を追い払うのかと。もっと早く気づくべきだった、屋根にそびえる、あの標識に。そうすれば、決してこの家に誠実な女性など求めなかった。風は家の中でも人の心をもてあそぶ、屋根の上と同じだが、ただあんな音がしないだけ。あの人たちが、この苦しみを気にかけるはずはない、なにしろ娘が玉の輿にのったのだから。
	3	凍れる涙	2		凍ったしずくが頬から落ちる。知らず知らずに泣いていたとは！ おや、涙よ涙どうして、そんなに生ぬるい？ 水と化してしまっは冷たい朝露と同じではないか。そうではなく、胸の奥底から煮えたぎって、ほどばしれ、この冬の氷をすべて融かさばかりに。
	4	かじかみ	4		雪野原でいたずらにあの娘の足跡を探す。ここは彼女が僕の腕にすがってよく散歩した草原だった。この白い大地に口づけし氷も雪も熱い涙で融かしてしまいたい、あの大地が見えるまで。どこに花がある？ どこに緑がある？ 花々は朽ち果て芝生も枯れ果てた。ここから、なんの想いでも携えていくことができないのか？ 僕の苦しみが黙せばあの娘のことを誰も語ってはくれまい。僕の心は凍てつき、そのなかであの娘の姿も冷たく凍てついている。いつか僕の心が融けるとするならばあの娘の姿も流れ去ることだろう。
	5	菩提樹	5	恋	市門の前の泉のほとりに菩提樹がひもと立っている。僕はその木陰でいつも夢にふけたものだ。僕はその幹にいつも愛の言葉を刻み、喜びにつけ、悲しみにつけそこに引き寄せられていった。だが、今日も旅ゆく定め。夜更けにそこを通ったが、暗闇だというのに目をつむってしまった。すると、小枝がざざめいた、あたかも僕に呼びかけるように。お若いのこちらへ来ないか、ここに君の憩いがある、と。そこへ冷たい風が顔にまともに吹き付け帽子を飛ばしてしまったが、それでも僕は振り向かなかった。今、僕はあそこから遠く離れたところまで来たが、まだ、あのさざめきが耳に残っている。あそこなら憩いが得られるのに。
	6	あふれる涙	4		眼から涙がとめどなく雪にこぼれ落ちると、冷たい雪片がむさぼるように熱い悲しみを吸い込む。若草が萌え出るときには生暖かな風が吹いてきて、氷は浮氷に砕け散り、淡雪も融けてしまう。雪よ、僕の想いを知っているね。お前はどこに流れてゆくのかい。僕の涙について行くが良い。いずれ小川が抱きとめてくれよう。そして小川は、にぎやかな通りを出入りする時、僕の涙が熱くたぎれば、そこに、僕の恋人の家があるのだ。
	7	流れの上にて	4		あれほど楽しげに音を立て激しく透き通るように流れていた川よ、いまやお前は静まり、別れの挨拶さえしてくれない。お前は固く硬直した外皮に覆われて、冷たく、身じろぎもせず砂の中に横たわっている。お前の表面に尖った石で刻み込もう、恋人の名前と日付と時刻を。それは、初めて挨拶を交わした日と僕が立ち去った日付だ。そして名前と数字のまわりを砕けた輪で囲もう。僕の心よ、この小川はお前の姿に似てはいまいか。あの下でも堅い氷を突き破らんばかりに、水かさが増しているのだろうか。
	8	かえりみ	2		足の裏が焼けつくようだ、氷と雪を踏んできたのに。だが一息入れるつもりはない、町の塔が見えなくなるまでは。幾度も石に蹴つまづき慌ただしく町を去ったが、鳥どもが屋根から雪や雹のつぶてを僕の帽子めがけて投げた。僕を迎えてくれたときは違ったね。移り気な町よ。光り輝く家々の窓辺では雲雀とうぐいすが美声を競っていた。こんもりとした菩提樹が花咲き、きれいな水路がさらさら流れ、そして、ああ、少女の眼が輝いたとき、あのことが起きたんだね、きみ。あの日のことが心に浮かぶともう一度、振り返ってみたい。ふらふらと立ち戻ってあの娘の家の前にそっと立ってみよう。
	9	鬼火	3		岩山の奥底へと鬼火が僕をいざなったが、出口を見出すことは難しいとは思わない。さまようことには慣れているし、どの道でも目的地には着くものだ。我々の喜びも悲しみも、すべては鬼火のたわむれのような。涸れた沢の跡をたどってゆっくりと、うねりながら下ってゆこう。どの川の流れも海に注ぐように、どのような苦しみにも、それを葬る墓はある。
	10	休息	3	人生	こうして横になると初めて疲れていることに気づく。宿もない旅路でも歩いていれば元気だったのに。僕の足は疲れを知らなかったし、立ち止まるにはあまりにも寒かった。荷物の重みを感じたことはなかったし、追い風が僕を先へ先へと進めてきた。手狭な炭焼き小屋に仮寝の宿を見つけたが、手足の傷がずきずきしてとても休まりそうにない。僕の心よ、嵐と戦っていたときにはあれほど奮い立っていたのに、静かになると、ふさぎの虫がちくちくと刺すのがわかるだろう。
	11	春の夢	4	恋	僕は五月に花咲く目もあやな花の夢を見た。緑な草原と楽しげな鳥の囀き声も。だが、鶏が夜明けを告げて、眼を開くと、あたりはまだ冷たい暗闇で、屋根から鳥の叫び声かしていた。それにしても、あの窓硝子に木の葉に描いたのは誰だろう。きっと木の葉は嘲笑うっている、この真冬に花の夢を見た僕を。僕は次々に愛の夢を、可愛い娘の夢を抱擁と口づけの夢を、歓喜と至福の夢を見た。だが、だが鶏が夜明けを告げて、僕の心も目覚めた。いま、一人でここに座り夢に思いをめぐらせる。ふたたび眼をつぶるとまだ胸がときめいている。いつ窓辺の木の葉は緑になる？ いつ僕は恋人を抱けよう？
	12	孤独	3	社会	鉛色のちぎれ雲が晴れわたった空を流れゆくように、縦の木の梢を弱々しい風が揺らすとき、足取りも重く、僕は大通りをゆく。明るく楽しげな人々の中をただ一人、声をかけられることもなく。ああ、世の中はこんなに明るい！ 嵐が吹きすさんでいたときでもこんなに惨めではなかったのに。

## シューベルト作曲「冬の旅」・・・第二部

部	No.	場面	分	疎外	内容
第二部 33分	13	郵便馬車	2	恋	通りから郵便馬車の喇叭が聞こえてくる。 こんなに高鳴るとは、なににごとか。僕の心よ？ 手紙など来るわけがないのに、いったいなぜ、そんなにはやるのだ。僕の心よ？ 馬車はあの町からきたのか、僕が愛した人のいる町から。僕の心よ？ いちどそちらを見やっ、どうなっているか尋ねたかろう。僕の心よ？
	14	霜おく髪	3		霜が白い輝きを僕の髪に撒き散らした。これで老人になれるかととても嬉しかった。 だが、霜はすぐに融け去り、また黒髪が現れたので、おのが若さにぞっとした、なんと極まで遠いことかと。 夕焼けから夜明けまでに白髪になった人もいるというが、誰が信じよう。僕はそうならなかったではないか、こんな長旅を続けているのに！
	15	からす	2	人生	カラスが一羽町からついてきて、今日からずっと頭上を巡回している。 からすよ、不思議な生き物よ、僕から離れたくないのか。 そのうち、ここで獲物としてこの体をついばむつもりか。 いいだろう、そう長いことではあるまい、杖を頼りに旅を続けるのも。 からすよ、最後に見せてくれ、墓場に至るまでの忠実を！
	16	最後の希望	3		木立のあちこちにまだ色づいた木の葉が見える。僕は木立を前にしてしばしば物思いにふける。 一枚の木の葉を眺めそれを僕の希望に託す。 風が木の葉をもてあそび、僕は体をあらんかぎり震わせる。 ああ、木の葉は地面に落ち、それとともに希望もついでた。僕は地面にくずれおれ希望の墓に涙をそそぐ。
	17	村にて	3	社会	犬が吠え、鎖が鳴る。 村人達は寝床で高いびき、夢見ては一喜一憂して元気を取り戻す、朝になれば、すべては融け去ってしまうのに。 そして、また枕の上で探そうというわけだ。 さあ目ざとい番犬ども、人がまどろむ時間でも、僕を休ませるな！ 僕は、すべての夢を見果てた。 眠りこけた村で、何をぐずぐずしているのか。
	18	嵐の朝	1		嵐が引き裂いたぞ、灰色の空の衣を。 ちぎれ雲が舞い飛んでいる、あちらこちらに、ふわふわと。 真っ赤な火災が雲間をつんざく。 まさにこれこそ朝だ。僕の心は空に描かれたみずからの姿を眺める。 これぞまさしく冬、冷たく猛々しい冬なのだ。
	19	まぼろし	2	人生	光が踊るので、僕はあちらこちらへと、そのあとを追っていく。 もちろん知っているさ。 鬼火が旅人を惑わしていることくらい。 でも、ああ、僕のように惨めな者は目もあやな謀りに身を委ねなくなるものだ、氷と闇と恐怖の向こう側に明るい暖かい家と愛くるしい女性を見せてくれるから。 いまの僕には、幻だけが救いなのだ。
	20	道しるべ	3		いったい、なぜだろう、他の旅人達の行く道を避け、人目につかない、雪に埋もれた岩山の小径を選ぶとは。 僕は何もしていない、人目を憚るようなことは。 なんと馬鹿げた欲動が僕を荒野へと駆り立てることか。 街道には道しるべが立っていて、それぞれ町へ出る道を指している、だが僕は、あてどなく旅を続ける、休息することなく、安息を求めて。 一本の道しるべが、僕の目の前に揺るぐことなく立っている。 この道を進まなければならない、誰も帰ってきたことのない道を。
	21	旅籠	6	社会	とある墓地へと僕の道は通じていた。 ここしか休む場所はないと僕は思ったものだった。 緑の葬儀の花環はその家の標識で、疲れ切った旅人を冷たい旅籠へ招き寄せる。 なんと、この家の小部屋はすべて塞がっているのか？ いまにも崩れそうに倒れ、深く傷ついているのに。 ああ、慈悲のかけらもない主人よ、それでも僕を拒むのか。 ならば旅を続けるしかあるまい、頼りにする旅杖よ！
	22	勇気を	1		雪が顔に吹きつけてきたら、振り落としてやろう。 心が胸の内では不平を言っても、僕は高らかに歌ってみせよう。 心が語りかけてくることに聞く耳などもない。 心が何を訴えかけてきても動かない。 繰り返すは愚か者のすることだ 喜んで世の中に飛び込もう、雨風にめげず。 この世に神いませば、われらが神になってみせよう。
	23	幻の太陽	3	人生	天空にかかる三つの太陽をじっと見つめてきたが、太陽もうつろな目で立ち止まったままだ、僕から離れないとでも言いたげに。 照らすなら、他の人の顔を探せ！ そう、この間まで僕にも三つの太陽があったが、いまは最良の二つが沈んでしまった。 三つ目も、その後を追ってくれれば、暗闇のなかで落ち着くことができるのに。
	24	辻音楽師	4	社会	向こうの村はずれに辻音楽師が立っている。 かじかんだ指で懸命にライアーを回している。 氷の上を素足のままふらふらと行ったり来たり。 彼の小さな血はまだ空のまま。 誰も耳を傾けようとし、誰も目を向けようとし。 犬だけが老人のまわりで唸り声をあげている。 だが老人はすべてをなすがままに任せ、ひたすら取っ手を回しライアーの音は静まることはない。 風変り老人よ、お前と一緒にいこうか。 僕の歌に合せてライアーを回してくれるかい。

(注)紙の音がするので、開幕中は、このA4紙をしまってください。